

春日大社 着到殿



●春日大社 着到殿（国指定・重要文化財）

着到殿は1200年以上続く、3月13日の天皇陛下による国家的な春日祭にて重要な儀式が行われる建物です。春日祭は天皇陛下が御代理である勅使を遣わされ、春日大神様へ国家と国民の繁栄と平和を祈られる大祭です。着到殿は春日祭の開始に当たり、古くは都から2000人以上の供を従えてきた勅使が天皇陛下からの儀式の大役を確認する「着到之儀」を行う聖域です。

現在も東京の宮内庁より掌典職員が勅使として、平安時代の「延喜式」に則った天皇陛下から神様へのささげ物である「御幣物」を携えて参向され、「着到之儀」を行い御本社で祈りを上げられます。勅使が遣わされる神社は皇祖神を祀る伊勢神宮を除けば、三勅祭と呼ばれる春日祭、葵祭、石清水祭が1200年以上続き、現在は出雲大社、熱田神宮、明治神宮、橿原神宮など全国で16社です。

なお着到殿は1100年前の平安時代初期916年に建立され、室町時代1413年に全く同じ形で造替され、600年以上を経た現在は重要文化財に指定されています。





●着到殿での演武にあたり「宝蔵院流槍術」と「春日大社 赤童子」信仰について

2023年7月9日、宝蔵院流槍術は「第1回春日大社奉納日本古武道大会（主催：日本古武道振興会）」において、春日大社 着到殿で奉納演武を行います。あらためて宝蔵院と春日大社の関係をご紹介します。

宝蔵院（宝蔵院流槍術）は興福寺の子院です。興福寺と春日大社の関係は深く、中世からは春日大神様のために神前にて読経が奉納され、春日大神様は興福寺の法相宗を護る神様として、一体の春日社興福寺となっていました。そのため春日大神様（若宮を含む五柱）の本地仏は釈迦様、観音様、菩薩様等と定められ、神仏習合となりました。その中で春日大神様（御本社・若宮）が顕現される際の御姿としての「春日赤童子」は、荒々しく厳しい御力を現し、力強い御加護を示すとして篤く信仰されました。

春日社興福寺は藤原氏の氏神氏寺であり、さらに大和一国は春日の神領、治は興福寺として、篤い信仰と同時に在地領主は興福寺の僧兵、春日社神人の大和士として技を磨き国を護りました。

戦国末期に誕生した宝蔵院流槍術は、江戸時代、武家を中心に全国に風靡されます。川路聖謨の「寧府紀事」では、幕末の宝蔵院流槍術の道場にも「春日赤童子」が祀られていた様子が記されており、武道成就に向け、大きな精神的支柱となっていたことが分かります。

現在も当流では先人に倣い、行事のたびに春日赤童子様を掲げ、稽古に励んでいます。

